

# 保健室と養護教諭の特質を生かした相談活動の 在り方に関する研究

- 一人で抱え込まずより有効な支援を行うために -

佐賀市立鍋島小学校 養護教諭 熊谷 すき子

## 要 旨

保健室に来室する子どもたちへ有効な支援を行うためには、養護教諭として教育相談を生かした支援の在り方と、担任をはじめ教員組織や保護者との連携を通じた指導・支援の在り方を探ることが大切である。そのためには、まず養護教諭の特質や役割を明らかにする必要があると考え、日頃養護教諭が行う相談活動の内容を、その方法と技法に注目し、時期別、対象別に洗い出してみた。その結果、どんな支援をすることが、養護教諭の特質を生かした4つの役割を果たすことになるのか、明確化することができた。また同じカウンセラーやアドバイザーの役割といっても、その支援の内容は保護者や児童といった対象の違いや、支援時期によっても大きく変わってくるということも分かった。そして、そのことが、より深く養護教諭の果たす役割について理解することにつながり、結果的に望ましい指導・支援の在り方を探る1つの方法になった。

<キーワード> 養護教諭の特質 養護教諭の役割 支援の方法と技法

### 1 主題設定の理由

今日、不登校や保健室登校、いじめや人間関係のトラブルやストレスから心身症に陥るなど「心」に問題を抱える子どもたちは、ますます増加傾向にある。その子どもたちをどう支援していくか、養護教諭としてどんな役割を果たしていけばいいのか、課題である。特に、保健室における相談活動の中で、養護教諭として子どもへの教育相談的対応が、現場において理解されなかったり、学校全体の問題にならなかったりといった連携に関する課題は、子どもを支援していく上でとても重要な問題である。そこで、学校での連携をスムーズに行うための第1歩として、養護教諭の特質や役割を明らかにすることが必要ではないかと考えた。

そこで、保健室に来室する子どもたちへの有効な支援を行うため、養護教諭として教育相談を生かした支援の在り方及び、担任をはじめ教員組織や保護者との連携を通じた指導・支援の在り方を探るため本主題を設定した。

### 2 研究の目標

- (1) カウンセリングの基本的な態度、技法を身に付け、子どもへの有効な支援を行うための教育相談の在り方を探る。
- (2) 担任をはじめとする教員組織や保護者との連携を通じた指導・支援の在り方を探る。

### 3 研究の内容と方法

- (1) 文献研究、講座受講、面接体験等から教育相談の在り方を探る。
- (2) 事例のまとめや文献研究から、一人で抱え込まない有効な支援の在り方を考察する。

#### 4 研究の実際

##### (1) 一人で抱え込まない有効な支援の在り方を探る

養護教諭の相談活動は、連携に始まり連携に終わると言われる。その中で、まず問題になるのが、養護教諭と学級担任との関係である。学級担任は学校の中では子どもたちのいわば親の立場・役割をもっている。子どもが一時的にせよ担任より養護教諭と親しい関係になると、担任がいやな思いをもつこともあると考えられる。例えば、保健室登校の初期においては、養護教諭は子どもと信頼関係をつくらうとするが、そのことが、なかなか担任をはじめ職員組織において理解されにくいこともある。まず、ここで連携の一步

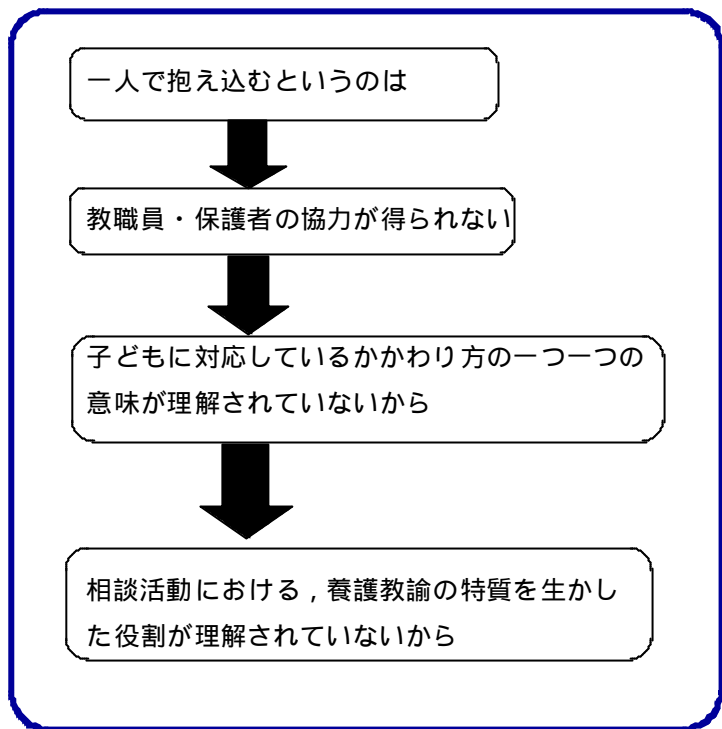


図1 一人で抱え込むということは

がつかずいてしまう。そして、養護教諭は一人で抱え込んでしまう。そうならないためにはどうすればいいのだろうか。本研究においては、その原因の1つは、養護教諭が子どもに対応しているかかわりの一つ一つの意味が理解されていないからだと考えた。結局、相談活動における養護教諭の特質を生かした役割が理解されていないから、こうになってしまうのではないだろうか。そこで、「具体的にどのような支援をすることがその役割を果たしていることになるのか」ということを明らかにすることにした。そうすれば、お互いの役割が明確化し、協力し合いながら子どもにとって有効な支援がスタートできるものと考えた。まず、私がこれまでにかかわった小学校での保健室登校の3つの事例分析から始めた。事例において養護教諭が行った支援の内容を、表1に基づいて段階別、対象別に整理した。

表1 段階別・対象別表

段 階 別		対 象 別		
第1段階	「リレーションづくり」養護教諭と児童間の望ましい交流が成立するまで	児 童	保 護 者	教 職 員
第2段階	「保健室登校への導入」リレーションができてから保健室登校に導くまで			
第3段階	「保健室登校」保健室に登校を開始してから主に保健室で過ごしている間			
第4段階	「教室への再登校」教室復帰させる時と再登校してからしばらくの間			

次に表2に基づいて養護教諭が行った支援の内容を方法・技法に当てはめ4つの役割の内容を表した。

表2 養護教諭の支援で使用した主な方法・技法と養護教諭の役割

養護教諭の役割	養護教諭の支援で使用した主な方法・技法
インターカーの役割（導入役）	・ かかわり行動・情報収集
コーディネーターの役割 （連絡調整役）	・ チームづくり・協力要請 ・ リファー・ヒューマンネットワーク
カウンセラーの役割（相談役）	・ 現実原則・快楽原則・傾聴・支持・抵抗予防
アドバイザーの役割（助言役）	・ シェーピング・助言・スキル訓練・教室参加へのレディネス ・ モチベーションを高める・戦略

ア 表1, 表2を基に実際にかかわった小学校での3つの事例を通して、養護教諭の果たす役割別にその支援内容を具体的に表3に表した。

表3 役割別支援内容（実際の事例から）

インターカーの役割	カウンセラーの役割
<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭訪問をする</li> <li>・自宅に帰る前に友達と保健室に寄ってくれるよう頼む<b>かかわり行動</b></li> <li>・児童の様子、クラスや担任の事で気になることを聞く</li> <li>・検温をしてその他の身体の状態や生活の様子等を聞く<b>情報収集</b></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「具合が悪い時はいつでも保健室に来ていいよ」と話す</li> <li>・給食は保健室で食べてよいことを伝える</li> <li>・母子一緒に保健室で楽しく過ごせるよう心掛ける</li> <li>・バドミントンやキャッチボールなどをして遊ぶ</li> <li>・額に手を当て「大丈夫？」と声を掛ける</li> <li>・無理をして登校しなくてもいいことや家でゆっくり休むことを勧める</li> <li>・母子一緒に家庭科室や音楽室で遊ぶ<b>快楽原則</b></li> <li>・がんばって授業を受けたことをほめる</li> <li>・不安の大きな母親の話相手になり、「そのかかわり方で大丈夫ですよ」と自信をもたせる<b>支持</b></li> <li>・保健室への登校時間を短くし、本人が来たい時に来てよいことを伝える（放課後も可）</li> <li>・放課後1週間に1回電話をし、体の様子など話す<b>抵抗予防</b></li> <li>・クラス編成について母親の思いを聴く</li> <li>・子どもの様子にとまどう母親の気持ちを聴く<b>傾聴</b></li> </ul>
アドバイザーの役割	コーディネーターの役割
<ul style="list-style-type: none"> <li>・無理をしない程度に登校してもらう（1時間程度から始める）</li> <li>・放課後少しづつ廊下や教室に行ってみないかと話す<b>シェーピング</b></li> <li>・自分が嫌な時は「嫌」と言ってよいことを話すと紙に「ただいま〇〇は留守にしておりますので遊ばれません」と書いて保健室のドアに張る</li> <li>・相談室に友達が入り嫌そうな顔をするがその時は何も言わなかった「どんな気持ちでした？どうしたい？」と後で聴くと「嫌だった、入って欲しくない」と言った。「まずは自分の感情を正直に表現することが大切だね」と話す<b>スキル訓練</b></li> <li>・保健室の仕事を手伝って欲しいと頼む<b>戦略</b></li> <li>・家造りが楽しいため、なかなか帰ろうとしない「もっと保健室にいていい？」と言うが「先生も仕事があるから」と言って帰らせる<b>モチベーションを高める・学校は楽しいという気持ちを高める</b></li> <li>・勝手に私の引き出しを開けるので「大事なものも入っているから開けないでね」と注意する<b>現実原則</b></li> <li>・「がんばって」「ここまでできたんだからもう教室に行けるよ」などと言わない。焦らないで「本人の行動を見守りましょう」と話す</li> <li>・行って当たり前という気持ちで「お帰りなさい」の声掛けをお願いする</li> <li>・前と比べたら、少しづつよくなっている事を知らせる</li> <li>・買い物や、部落の行事など本人が強く嫌がらないようなら積極的に参加させたり外に連れ出すよう話す</li> <li>・身体症状を少しでも軽減させるよう病院受診を勧める <b>助言</b></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人が音楽が好きなので音楽の先生に遊んでくれるよう頼む</li> <li>・同じ学級の子が来ると緊張するので担任に話ししばらくの間友達の来室を制限してもらう</li> <li>・校内での言葉掛けの方法などを全職員に要請する</li> <li>・養護教諭が不在の時、級外で対応してもらう</li> <li>・保護者が管理職と話し合う機会をつくる<b>協力要請</b></li> <li>・仲良しの友達に保健室に来てもらうよう頼み大きな段ボールで家を作り遊ぶ</li> <li>・保健室で給食を食べる時、クラスから数人来てもらう（はじめは仲のよい友達で、次第に友人を変えていく）</li> <li>・学級担任に、クラスの友達がさりげなく保健室に遊びに来よう話してもらう<b>ヒューマンネットワーク</b></li> <li>・支援委員会、生活指導協議会をもつ</li> <li>・学級担任と一緒に協力してやっていきましょうと伝える</li> <li>・教育相談の係や校長に状況を報告していく</li> <li>・担任に友達関係を注意深く観察してもらいこの子を中心に仲間づくりをするため話し合う</li> <li>・いじめた子どもにどうかかわるか話し合う</li> <li>・担任と一緒に病院の先生に面接に行き今後の支援方法について話し合う</li> <li>・保健室横に保健室登校の子どものために全職員で相談室を作る</li> <li>・児童を運動会に何とか参加させようと担任と同学年グループで何度も話し合う<b>チームづくり</b></li> <li>・教頭先生に母親との面接を依頼し気持ちを聴いてもらう <b>リファー</b></li> </ul>

## イ 児童に対して養護教諭が果たしている役割

### 第1．2段階【カウンセラーの役割】

快楽原則，抵抗予防の方法・技法を用いてカウンセラーの役割を果たしている。この段階では養護教諭の特質が大いに生かされている。養護教諭は，保健室で子どもが安心して過ごすことができるように，信頼関係を築くようなかかわり方や，自信をもたせるような言葉掛けを心掛けている。

#### 【養護教諭の特質について】

- 身体症状にかかわって心の健康問題を早期に発見でき，早期に対応ができる
- スキンシップ的操作からラポールを作りやすい
- 子どもを個人として見る
- 成績にこだわらないので子どもが心を開きやすい等

### 第3．4段階【アドバイザーの役割】

- ・ 体育のサッカーに，養護教諭と一緒に参加する
- ・ 放課後，養護教諭と一緒に教室に行ってみる
- ・ 図工の時間に養護教諭と一緒に廊下まで行ってみる
- ・ 何回か繰り返し廊下に机を置いて一緒に参加できる
- ・ 図工，理科の時間に廊下で参加できる
- ・ 図工の時間に教室で養護教諭と一緒に受ける
- ・ 理科の時間に，綿菓子作りをするため教室に入る

シェーピング，スキル訓練，戦略，モチベーションを高める，現実原則等の方法・技法を用いてかかわっているが主にこの段階では教室参加へのレディネスという方法・技法を用いて教室復帰に向けて学級担任へつなげようとしている



## ウ 保護者に対して養護教諭が果たしている役割

養護教諭は，すべての時期を通して，アドバイザーの役割とカウンセラーの役割を果たしているが，児童へのアドバイザーの役割の時の内容とは大きく違っている。主に使用している方法，技法と支援の内容は，

#### 【アドバイザーの役割】

- (助言)・ 専門医への受診を勧める，スクールカウンセラーの面接も勧める
- ・ とても疲れて帰ると思うので，十分な休養をお願いする
  - ・ 学校や教室には，行って当たり前という気持ちで「お帰りなさい」の声掛けをする。あまり必要以上にオーバーに言うと，かえってストレスになりやすい

#### 【カウンセラーの役割】

- (傾聴)・ 母親の思いを聴く
- (支持)・ 不安の大きな母親の話し相手になり「それで大丈夫ですよ」と自信をもたせる

保護者は，子どもの行動や言動に一喜一憂する場合が多く，それにより不安定になって，また悪循環に陥ることも多い。養護教諭は，信頼関係を保ちながら助言をしつつ，母親を支持していく役割を担っている。

## エ 教職員に対して養護教諭が果たしている役割

協力要請，ヒューマンネットワーク，チームづくり，リファーマという方法・技法を用いて養護教諭はすべての時期を通して，コーディネーターの役割を果たしている。特に第3～第4の時期，つまり子どもを教室復帰に向けて担任へつなげようとする時期にその役割は大きくなっている。第1～第2の時期で直接的に子どもや保護者と信頼関係を築く時期がうまくできていれば，第3～第4の教室復帰の時期までうまく

く進んでいくことができる。特に担任と子どもの1対1のかかわりにせず、学年でかかわるような働き掛けをしたとき、連携がうまくいった例がある。

## (2) 面接演習より

初めてのカウンセリング体験は、私にとって強い緊張と不安と恐れを感じさせた。丸いテーブルの下で、足の震えを止めようとしても止まらなかったのが忘れられない。日常とは全く違う空間にいるような感じだった。

### ア 「気持ちを聴く」ということ

話の内容にどうしても引き込まれる自分を感じた。

「より深く相手を理解しよう」と思えば思うほど引き込まれてしまう。そのため、クライアントが感情を言葉にした時、聞き逃してしまう。話は聞かすが、気持ちは聴けない自分だった。「頭が痛い」「具合が悪い」と言って保健室に何回も来室する子どもたちは、「もっとちゃんと聴いてよ」「うんうんとばかり言わないでちゃんと聴いてよ」「こっちを見て」と訴えていたのだろう。私の心の中ではいつも「受け入れるか」「教室にもどすか」そんなことばかり考えて、子どもと話をしていたような気がする。真に子どもの気持ちを聴いていなかった自分に気付いた。

### イ 「自分で自分の心を感じる」ということ

受容とか共感という何でも受け入れることと思っていた。しかし、相手の話を聴いて「自分はこう感じている」と常に自分で自分の心を感じることは相手との距離を取る上で大切なことだと学んだ。そのことは決して相手を受け入れていないことではなく、相手の言ったことは相手のこととして認めるということであり肯定することである。そして、それが共感につながっていくことを学んだ。

### ウ 「伝える」ということ

「あなたの話を聴いています」「あなたの気持ちを受け止めています」「あなたのことをもっと分かりたいと思っています」「あなたのことを大切に思っています」という気持ちは、なんとしても相手に伝えなければならない。どうやって伝えるか。そのための手段がうなずきであり、相づちでありその他繰り返しの言葉、反射の言葉、明確化の言葉であることを学んだ。また言葉だけでなく、眼差し、表情、素振り、身体でも伝えることができる。養護教諭が最も使えるもの、掌も含まれる。スキンシップの大切さを改めて感じる事ができた。

### エ 「遊び」ということ

面接の中で、子どもと遊びを通してかかわった。この面接を通して「遊び」がいかに大切かを学んだ。「遊び」を通して子どもは自分の内的世界を表現していることも知った。私は保健室登校児とバトミントンをしたり、キャッチボールをしたり、遊具で遊んだりすることがあった。それは、遊びを楽しむのではなく、子どもと心と心が交流することを感じるのではなく、いつも「他の子どもたちはどう見るだろうか、授業中なのに・・・」とか「他の先生たちはどう見るだろうか」と考えながら遊んでいたような気がする。子どもと遊んでいながら、心の中には、全然子どもが存在していなかった自分に気付いた。養護教諭が学校で子どもに遊びを通してかかわる場合“子どもと、今、ここを、共に、生きる”ということ、このことが何より大切だと感じた。

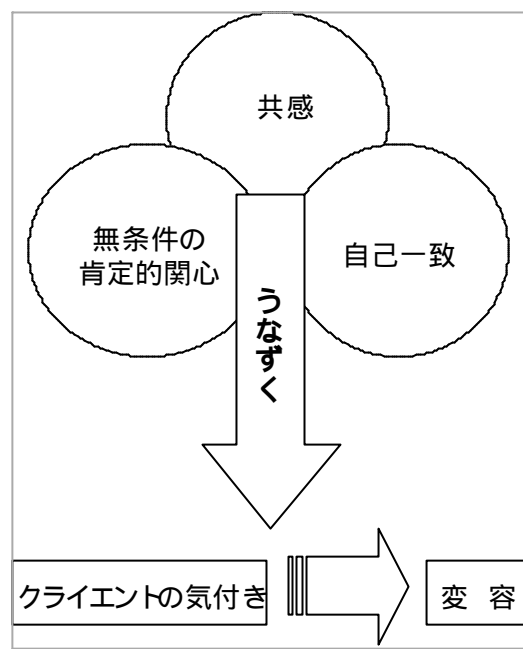


図 2 カウンセリングとは

## 5 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

養護教諭が保健室に来室する子どもたちへの有効な支援を行うためには、養護教諭として教育相談を生かした支援の在り方と、担任をはじめ教員や保護者との連携を通じた指導・支援の在り方を探ることが大切であると考えた。そのためには、まず、養護教諭の特質や役割を明らかにする必要があると考え、小学校における事例をその方法と技法に注目して分析を行った。その結果、時期別対象別に有効な支援方法が明らかになった。

- ・ インターカーの役割は、支援の第1段階で、主に児童や保護者に対してかかわり行動や情報収集の方法や技法を用いて、その役割を果たしていることが分かった。
- ・ カウンセラーの役割は、支援の第1段階から第2段階において、児童に対しては快楽原則や抵抗予防の方法・技法を用いて、その役割を果たしていることが分かった。この時養護教諭の特質が強く生かされていることが分かった。また、保護者に対しては支援の第1段階から第4段階まで支持、傾聴の方法・技法を用いてその役割を果たしていることが分かった。
- ・ アドバイザーの役割は、支援の第3段階から第4段階において、児童に対しては教室復帰に向けての支援の中でシェーピング、スキル訓練、戦略、モチベーションを高める、現実原則等の方法・技法を用いて、その役割を果たしていることが分かった。保護者に対しては支援の第1段階から第4段階までを通して助言などの方法・技法を用いて、その役割を果たしていることが分かった。
- ・ コーディネーターの役割は、支援の第1段階から第4段階を通して、教職員に対して協力要請、ヒューマンネットワーク、チームづくり、リファーマの方法・技法を用いて、その役割を果たしていることが分かった。

### (2) 今後の課題

養護教諭は教職員に対してコーディネーターの役割を果たしているが、その役割を果たすための1つの方法にチームづくりがある。教育相談係を中心にして支援委員会というチームを作り、定期的に話し合いをもっていた。この中で養護教諭として、子どもの状況、家庭での状況、保健室での状況などを報告し共通理解をもつようにしていたが、情報のやりとりだけに終わってしまっていた現状がある。もっと子どもの心の問題を理解するような会にすることが必要である。そのためには子ども理解のための情報項目の精選や、シートなどを用いた情報交換の工夫をしていきたい。

養護教諭は支援の第1段階から第2段階において、児童に対して信頼関係を築くためカウンセラーの役割を果たしている。しかし、そのことが担任や教職員にとってはなかなか理解されにくい場合があり、誤解のないよう十分話し合いをもつことが必要である。そのためには、養護教諭の役割や子どもへの支援の一つ一つのもつ意味について発信していくことが大切である。今後、情報発信の仕方を工夫していくことが課題である。

### 《参考文献》

- ・ 小倉 学 『改訂 養護教諭』 1990年 東山書房
- ・ 國分 康孝・門田 美恵子 『保健室からの登校』 1999年 東山書房
- ・ 大谷 尚子・森田 光子編 『養護教諭の行う健康相談活動』 2000年 東山書房

